

◆一関出張所管内を流れる東北地方で一番大きい北上川は、平泉文化が栄えた背景に深く関わっていたことをシリーズ化してご紹介しています。

北上川と共に生きた平泉文化 第6弾

— 栄華をきわめた奥州藤原氏 —

平泉を戦場とせず文化を守る

四代・泰衡の時代

1187年～1189年

金色堂の完成



金色堂は初代清衡が建立し、その清衡は中央壇内部に眠ります。

その後、左右に二つの仏壇が増設され、二代基衡、三代秀衡の遺体が安置されました。秀衡の遺体を安置し、金色堂が現在の形に整えられたのは、泰衡の時代です。

そして今もなお、金色堂には藤原三代の遺体が納められています。

泰衡と源義経



源義経は、16歳だった1174（承安4）年から、三代秀衡のもとで過ごしていました。しかし、1180（治承4）年、兄の頼朝が平氏を討つために拳兵すると、義経は秀衡が止めるのもきかずに頼朝のもとへと駆けつけました。

義経の活躍により平氏は滅亡しましたが、頼朝はその功績を認めなかったばかりか、義経に激怒、合うことも拒みしました。追われる身となった義経は、再び秀衡のもとに身を寄せました。

秀衡の跡を継いだ泰衡は、「義経を大将とし、兄弟そろって頼朝と戦いなさい」という秀衡の遺言を守り、義経のもとに結束していました。しかし頼朝の圧力は強くなり、頼朝の要請に従った泰衡は義経を自害に追い込み、義経側についていた自分の弟たちの命も奪ってしまいました。

奥州藤原氏が滅びるまで

源氏にとって陸奥国は、奥州藤原氏が滅びる100年以上前から因縁のある国でした。1087（寛治元）年に終わった後三年の合戦で勝利した清衡は、敵方の清原氏が持っていた領土を受け継いで発展させ、やがてみちのくの統治者になりました。しかし清衡に加担した源義家には、朝廷から何の恩賞もありませんでした。先祖の悔しい思いを知っていた頼朝にとって奥州支配は、源氏再興と「武士の世」の確立に向けたかねてからの計画でした。

頼朝は、義経を討つのが遅かったという口実で、大軍を率いて1189（文治5）年に奥州に乗り込みました。泰衡は平泉館に火を放ち頼朝から逃げましたが、北へ逃走の途中で自分の家臣の裏切りにあい、命をとられてしまいました。

泰衡は、平泉を戦場としなかったため、中尊寺、毛越寺をはじめ諸寺院は無事でした。栄華を誇った奥州藤原氏の時代は幕を閉じましたが、結果的に泰衡が平泉文化を守ったのです。